
機動戦士ガンダム～小さなニュータイプ～

アスタル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム〜小さなニュータイプ〜

【Nコード】

N8507Z

【作者名】

アスタル

【あらすじ】

神谷悠斗は一人の男の子を救って死んだ・・・はずだったのだが、目覚めると、目の前にはセイラ・マスとその背後にはMS-06ザクとRX78-2ガンダムが佇むサイド7だった・・・。
そこで神谷悠斗はアステル・ロアと名乗り、一年戦争を戦うことになる・・・。

人物・機体紹介

人物・機体紹介

オリジナル主人公

名前：神谷 悠斗 アステル・ロア

年齢 15歳

身長 165.2cm

体重 50.3kg

髪型：金髪でやや長髪

顔： toaの短髪ルークの顔

好きな事：機械いじり 掃除

嫌いなもの：平和を乱す物

搭乗機体

RX78-1 プロトタイプガンダム

機体情報

額のV字型ブレードアンテナや、人間の目を模した複眼式のセンサーカメラが特徴

前腕部 一部凹んでいる所に専用のビームライフル固定

足首 カバーにスリットが3本入れられている

コアブロックシステム未完備（後に完備）

基本武装

頭部 60mmバルカン砲

左腕 ビームライフル

右腕 ガンダムシールド

背部 ビームサーベル

代替武装

左腕 ハイパーバズーカ、ガンダムハンマー

サイド7(前書き)

完全に衝動で書いた自己満足小説です。こんなガンダムじゃない！という方はお引き取りください。それでもよろしいという方のみどうぞ

サイド7

俺の名前は神谷悠斗 工業系の高校に通ういわゆる学生だ。

学校から自宅にかえるまで散歩を楽しみ、家に帰って眠るといふ普通の日常を送っている。

そんな当たり前の日々がずっと続くのだと思っていた。そうあのみままでは……。

その日、自宅に帰る途中だった俺はいつも通る交差点で飛び出していく男の子を見かけた。それだけならたまにでもみる光景だった。

しかし、折悪くスピードを出した車がこちらへ突っ込んで来る。

「危ない！」

俺は無意識の内に交差点の男の子の所へ走って、なんとか男の子を突き飛ばす事出来た。

しかし、俺は逃げる事が出来なかった……。

視界がブラックアウトする。

そこで俺の意識は途絶えた。

「……きて、しっかりして。」

女の人の透きとおるような美声が脳内に響く。

俺は静かに目を開ける……

？

ココハドコデスカ

アナタハドチラサマデスカ

驚くのも無理は無い。

目の前の人物はなんと機動戦士ガンダムの登場人物（と、いうか主要人物）のセイラ・マス、そして目の前に広がる光景は、やはり「機動戦士ガンダム」で見たことのあるMS06-ザク？（以後ザクと呼称）二機の襲撃を受けているサイド7

「良かった……。目が覚めたのね。さ、ここはあぶないわ急いで向こうのシェルターへ」

セイラさんに言われるがままその後を追おうとしたその時……。俺の脳裏にザクに襲われ、機体を捨てて逃げるパイロットの映像が閃いた！。

いけない！

俺はきずけば足の向く方向へセイラさんがとめるのも聞かずに駆け出して行った。

あのザクがここに来れば間違いなくサイド7がなくなっちゃう……

俺は、漠然とだがそう感じ取る事ができた。

俺は乗り捨てられたMSを見上げる。

RX78-1 プロトタイプガンダム（以後「プロトガンダム」と呼称）

本来の歴史には登場しないはずの機体、そして先ほど見た二機のザク以外のもう一機のザク

もうやる事はわかっていた。

俺はハッチが開いたままのコクピットに座る。

「マニュアルがあるはずだ……。」

俺が自分の足元にそれを見つけ、手を伸ばそうとしたそのとき……。

頭に何かが生と一緒の流れこんでくる。

……うつ、この声は、何だ？ でもこれで……。

俺は足元のマニュアルから再び視線を正面に向け、落ち着いてプロトガンダムを起動させてゆく……。

ザクがヒートホーク片手にこちらへゆっくりと近づいてくる。

「間に合うか……、よしいくぞ」

沈黙していたプロトガンダムが動き出す。

それを見たザクのパイロットは、

「あ、あのMSあれだけザクマシンガンをくらってまだうごけるのか、ば、化け物めええええ」

そう叫びながら、ヒートホークを振り上げ、迫ってくる！

ヒートホークが振り下ろされる刹那、俺は機体にスウェーバツクをかけ、攻撃をかわした。その瞬間背中の中のランドセルからビームサーベルを引き抜き、相手のMSが空立ちになった時を見計らって、コクピットに向かって、思い切りビームサーベルを突き刺す！

「シャ、シャア少佐。ぐがあああああ」

パイロットの断末魔！、俺には相手のパイロットの死の瞬間が見えた！

おもわず手で顔を覆うが、このビジョンは消えてくれない。

「こうするしかなかった……。でも、やっぱり気持ちのいいものじゃないな。」

ザクを撃破して、そんな事を思いながら、俺はしばし呆然としていたが、やがて先ほどのMS戦闘が終わっているであろう俺がもっていた場所に向かった。これからどうなっていくのか、自分がした事によりこれから自分自身に起こる事、俺にはそれがしっかり認識できていた……。

サイド7（後書き）

自分が思い浮かんだ事をそのまま本能で打ち込んだだけです。予想よりはるかにつまらないという方本当にすいません。こんな小説でよろしければお付き合いください。

赤い彗星の脅威（前書き）

今回はシャアの視点でも書きました。最初のシャアとの戦闘です。

赤い彗星の脅威

ムサイ級旗艦型軽巡洋艦ファルメル

この艦の艦橋には赤い軍服と仮面をつけた男シャア・アズナブルと軍服を着た小太りの男ドレンが今後の作戦について話し合っている。

「偵察に出したザクが全滅しただと？」

「はっ、スレンダーの最後の報告によれば命令違反を侵したジーンをデニムがおさえきれなかったため、デニムもなし崩し的に戦闘に参加し、スレンダーもやむなく戦線に参加したその直後にやられたようです。」

「一挙にザクを3機も失うとはな。やはり連邦軍の開発したMSの性能は我々のMSザクなどは比べ物にならぬくらいの性能のようだが、できれば、一挙にザクを3機失うなどという事を認める事はできませんよ。」

「どうなされます？。」

「ふむ……、ドレン、レーザー通信回路を開け。ドズル中将にだ。」

「はっ。」

レーザー通信回路が開き、ドズル・ザビ中将の不機嫌そうな顔が映像に映る。

作戦終了祝いのせつかくの晚餐の支度が無駄になったとご立腹であ

つたがシャアからV作戦の事を聞くと目の色を変えて話に乗ってきた。

「何、V作戦だと?。」

「はっ、連邦軍の新型MS、並びにそれに伴う新造戦艦の開発計画です。作戦終了後の、帰還途中これを見いたしました。つきましては帰還途中でありましたので、武器弾薬が底をについておりまして・・・。」

「補給が欲しいのか?。」

「それとザクを5機。」

「MSザクを5機も失ったのか!、貴様ほどの者が。」

「中将、連邦軍のMSはそれほどの性能を有しているのです。その証拠に5機のザクのうち4機のMSは連邦軍のたった一機のモビルスーツに・・・。」

「む・・・、よしザクを回す。V作戦の情報は何でもいい、手に入る。それとそのMSを破壊もしくははできるならば捕獲するのだ。」

「はっ、やってみます。」

「それでこそ、シャアだ。」

レーザー通信回路が閉じると、シャアはすぐさま次の行動に移る。

「ドレン。私はサイド7に潜り込む。」

「シャア少佐お一人でありますか？。それに補給は・・・」

「戦いとは常に二手三手先を読むものだ。偵察部隊が戻らないのだ。補給を行い戦闘するにも情報は必要不可欠なのだ。だから私が行くのだ」

「はっ。 一武運を。」

シャアがサイド7に侵入すると、荒野と化したコロニー、MSのパーツらしき物

が見られる。それを一通り写真に収め、調べていると、シャアに向け銃を向ける少女セイラの姿。

シャアが、銃を捨てて手を挙げ降参の意を示すと、セイラが唐突に喋り出す。

「ヘルメットを取ってください。そして後ろを向ってください。」

む、似ているアルテイシアに。そう思いつつも言葉には出さずヘルメットを取り、マスクを外すシャア。その素顔にセイラは見覚えがあった。

「キャスバル兄・・・さん。」

「やはりアルテイシアか・・・、妹よ。お前はテキサスコロニーにいるはずではないのか？」

「兄さんこそ、どうしてジオン軍に・・・。」

「父、そして母の無念を晴らすため、身分を隠しているのだ。それ

よりアルテイシアおまえは・・・」

その瞬間、シャアの立ち位置より少しずれた地点にビームが走った。ガンダムである。見つかった！シャアはWBのクルーの銃撃をかわしながら出口へと急ぐ。が、銃撃がカメラに被弾する。

「しまった。チィッ！」

しかし、悠々と引き上げるシャア。WBのクルーはそれを眺めるしかなかった。

ファルメルに戻るとシャアはすぐさまMSデッキに入り、

「ドレン、潜入は失敗だ。私のザクを第一線装備で射出しろ。こうなれば直接連邦軍のMSの性能を見せてもらう。」

「またお一人ですか。」

「今回は相手の力量を見るだけだ。連邦軍のMSの性能を見たらすぐに退く。心配はいらん。」

「分かりました。シャア少佐がMSで出られる。シャア少佐のザク用意！」

射出されたザクに搭乗したシャアが呟く。

「見せてもおうか。連邦軍のモビルスーツの性能とやらを・・・。」

と・・・。

今まさに出港したWBに警報が走る！どうやらシャアがMSでせめてきたようだ。

「MS一機こちらに向かってきます！」

「ザクではないのか？」

「し、しかしこのスピードで動けるザクは存在しませんよ！」

「シャア……。赤い彗星のシャア。」

俺がブライトに呟く。

「分かるのか？」

「おそらく、MSでこちらの実力を伺いにきたんだと思います。」

「。。。。」

「今回はおそらく様子見だと思えます。だから。。。」

「ガンダム、発進準備！」

「ブライトさん！」

「言ったはずだ。私はお前を信用したわけではない。」

「・・・」

信用されていないのはわかってるけど、やっぱり聞いちゃくれなかったか・・・。

（回想）

もといた場所に立ち返ると、俺が搭乗しているプロトガンダムとは異なる白・赤・青のトリコロールの2号機RX78-2ガンダム（以後ガンダムと呼称）とその足元に倒れるザク一機、そして目の前に広がる爆発により生じたであろう大きな穴、それはサイド7がこの戦闘でどうなったかを物語っていた。

「やはりこうなったか、これでサイド7に住む人々は・・・」

例え、ここにいっても何もできなかったらどう。それは分かっている。悪いのはコロニーで戦闘を仕掛けてくる連中だ。でもコロニーの破損による難民の発生、それによるおびただしく発生する死者、その事実を決して理屈だけで割り切れるものではなかった。

俺がそんな事を考え、俯いているとONになった外部スピーカーからやけに若々しい、俺と同じ年ぐらいであろう少年の声が届く。

「そのガンダムのパイロット、僕はアムロ・レイです。聞こえていたら応答をお願いします。」

「あ、ああ俺は、・・・アステル・ロアだ。君も・・・、ガンダムにのっているのか。」

本名は伏せて、その場で思いついた名前を名乗る。

「無事な人が一人でもいてよかったです。こちらに避難民が避難しているWBがあります。まずはそれと合流しましょう。」

アムロの乗るガンダムについていくと、やはりよく見知っているペガサス級強襲揚陸艦WBが姿を現す。

アムロが搭乗するガンダムに通信がつながる。応答したアムロは自分がガンダムの性能のおかげでザク2機を撃破した事を伝えた。俺も通信をつないでもらい、プロトガンダムに搭乗し、ザク1機を撃破した事を伝えた。こちらにつながった通信の声を聞くと驚きを隠せないようだった。

当然だ。俺もアムロも子供の身でガンダムを操縦しただけでなく、ジオンのザクを撃破したのだから。

さらに、俺がプロトガンダムのパイロットが死んだと伝えると（逃げたと伝えるのはさすがに酷だと感じた。）ガンダムのパイロットも戦死していたようで、予想していた通り、暫定的にはいえ俺とアムロは現艦長の頼みでガンダムのテストパイロットとなった。

プロトガンダムから降りて、艦長室に向かう俺に対して、WBの艦長が先頃死んでしまったため、こちらも暫定的にはいえ艦長になったブライト・ノアが俺に問い詰めるように質問してきた。

「アステル・ロア、いやおそらく偽名だろうが、貴様は一体何者だ。」

ああ、やっぱり来たか。俺はこの世界の人間ではないのだから、俺の身元など調べた所で出てくるはずがないのである。身元の分からぬ物は敵のスパイか何かだと疑うのがこの状況では常識だろう。敵のスパイと疑わしい者を仮にも自分が運用する艦に乗せたくはないだろう。この質問は至極当然といえた。

「何者か分からなければどうするんです。俺をプロトガンダムから降ろして拘束するんですか？」

俺は質問に対して、質問で返す。

「くっ、そうしたいのはやまやまだが、いまWBにはMSを操縦できるのはアムロとお前しかいない。このWBをジャブローに入港させるまでは貴様の事は考えさせてもらうさ。」

「ザクを何機か落とせば、俺のスパイ容疑は晴れるんですか、ブライトさん？」

「自分の立場が分かっているのならせいぜい努力するのだな。そうすればお前を信用できる日もくるだろう……。」

と、俺とブライトの間にはこんな事があってブライトは俺を一切信用していないようだ。（当然だとは思いが……。）

「発進だ。アステル聞こえなかつたか？」

「・・・アステル・ロア、プロトガンダム出る。」

「アムロ 行きまーす。」

プロトガンダム、続けてガンダムが射出される。シャアが通常の3倍に恥じぬ速さでこちらに迫ってくる！

「こさせるか！」

まずガンダムがビームライフルを放つが、ザクは左方向にスライド移動して回避し、回り込むようにガンダムの背後へ移動する。

「メ、メガ粒子砲！何ということだ。連邦軍のMSは戦艦の主砲並みのビームライフルをもっているのか。しかし、当たらなければどうということはない。」

ザクがガンダムに照準を合わせ、ザクマシンガンを放つ瞬間！

「今だ！」

ビームライフルを構え、チャンスを待っていた俺はビームライフルを放つ！

だが、ザクはこちらに即座に照準を合わせ、回避運動を行いながらこちらにザクマシンガンを放つ。

間に合わない！俺はとっさに盾をかまえるが、間に合わず半分ほどはくらってしまいます。

「馬鹿な、直撃のはずだ。ええいこちらの武器では相手のMSの装甲を貫けぬとでもいうのか。」

ザクがヒートホークをかまえ、ガンダムに急接近する！

だが、ガンダムはバーニアを点火、上昇してザクから距離をとりながら牽制に頭部バルカンを放つ。」

「な、なんとという運動性だ。どうやら連邦軍のMSは火力、運動性、装甲全てにおいてザクを遥かに上回る機体ようだ。これならデニム達がやられたのも頷ける。しかし！」

ザクは頭部バルカンが被弾するのもかまわず突進する。

「させるか！」

俺は牽制にビームライフルを連射する。しかし、ザクは機体を急上昇させ、全て回避する。

「あの黒い奴のパイロットは落ち着いているようだが、まだ腕がついていっていない。白い奴は黒い奴より腕は上だか戦場の空気に慣れていないらしい。どちらも一機ならばどうということはない敵だが、二機相手ではな。さて、どうしたものか。連邦軍のMSの性能は十二分に見せてもらった。引き際か……。」

そんなとき、ドレンから通信が入る。

「シヤア少佐、御戻りください。ドズル中将から補給の連絡が入りました。」

「了解。ちょうど引き上げようと思っていたところだ。」

シヤアは俺たちに余力がないと見るや、悠々と退いて行った……。

俺はプロトガンダムのコクピットで大きく息をはく。見事に遊ばれたな、俺もアムロも。死ななかつたのはガンダムの性能のおかげだ。分かつてはいたが、これから戦わねばならぬ敵に対して俺は脅威を覚えた。

ガンダムとプロトガンダムを着艦させ、艦長室に向かうと、待っていたのはブライトのアムロに対する説教と、俺に対する俺への不信感がさらに増えたという言葉であった。

「パイロット兩名、ガンダムの性能を当てにしすぎだ。試作機には余分なパーツはないのだぞ。戦いはもっと有効に行え！」

アムロが顔を歪める。

「な、何だって。」

「こついわざる負えないのが今の我々の状況だ。それが理解できないのなら、今すぐにでもサイド7へ帰れ！」

「ぼ、僕はあなたが……。」

「ああ、憎んでくれてかまわんよ。」

「それに、アステル貴様への疑いがますます濃くなった。なぜシヤアがくるのが分かった。それに大した八百長試合だったな。ガンダ

ムの性能を向こうに教えるのが目的か？」

俺はムツとなったが、こらえた。俺の身元が分からないもは事実だから。疑われているのだからこれくらいは言われるだろうと覚悟はしてた……

だが、手を出しかけたのは俺ではなくアムロの方だった。俺は慌ててアムロを羽交い絞めにする。

「アムロ、寄せ！」

「どうして！アステルは精一杯戦ってきて、あんな事言われて悔しくないのかよ！」

「俺の身元が分からないのは事実だ。俺の事を思ってくれるんなら今は堪えてくれ、頼む……。」

アムロはどうやら落ち着いてくれたようだったので、俺はアムロを解放した。

アムロは無言のまま艦長室を出て行き、妙な空気になった。

俺はこの世界で、自分で選んでWBに乗った。でもそれは同時にWB内の空気も変えるものだった。これからWBはどうなっていくのだろう……。

俺は内心不安でいっぱいだった。

赤い彗星の脅威（後書き）

基本的には主人公の一人称で書き、場合によってはアムロやシャアの視点で書きたいと思っておりますが、作者からの視点で書いたほうが分かりやすいでしょうか？

どうか、この小説を読んでくださる方、ご意見ください。

補給艦撃墜作戦（前書き）

WB初の本格的対艦先頭です。今回もよろしくお願いします。

補給艦撃墜作戦

ムサイ級旗艦型軽巡洋艦ファルメル

ここではレーザー回線をつないだシャアがドズルからの補給に関する報告を受けている。

「パプア補給艦？あんな老朽艦では十分な補給を得られません。それにザクの補給は……。」

「現状を考えるのだ。十分な戦力で戦える昔とは違うのだぞ。貴様ならザク3機も送れば、ムサイを失ってでも敵のV作戦をの機密を手に入れられるはずだと踏んだのだ。期待を裏切るなよ？」

「しかし、連邦軍のMSの性能は今送ったデータの倍はあると考えますが……。」

「シャア、同じ事を二度も言わせる気か？」

「ハツ……。」

レーザー回線が途絶える。シャアは困惑しているようだが、その視線はマスクをかぶっているため確認はできない。

「ザク5機の補給を要請したのに補給は3機、補給艦はくたびれた老朽艦、連邦軍のMSに対しては要求した物資の補給でも足りないぐらいだというのに……。」

作戦を考え直さなければならんな……。シヤアは一人呟く。

ルナ2へと向かうWB。レーダーが何かをキャッチする。

「シヤアのムサイに接近する船があります。」

「何。戦闘艦か?。」

WBのキャプテン、ブライトが報告を聞き、確認をとる。

「いえ、これは……。補給艦のようです。」

「物資を失って、補給に入ったシヤアなら私達も対等に戦えるかもしれないわ。」

WBの操舵手、ミライ・ヤシマが意見を出す。

「こちらはまともな戦力など持つじゃないのだから。」

「でも、シヤアが今補給を受けるといふ事は私達がルナ2へ入る前に補給を終わらせて、私達の所に攻撃を仕掛ける余裕があるからじゃないかしら?シヤアが本気で攻撃を仕掛けてきたら、防ぎきる自信がある?、ブライトさん。」

「そう思わせる罠だとも考えられるが……。アステル貴様はどう見る。」

「ミライさんの意見に賛成です。現状の状態でシヤアが本気で攻撃してくればおそらく防ぎきる事は難しいと思います。それに補給を

潰す事ができれば、それだけ俺達も余裕ができます。WBの今の状態から考えても、決行するべきだと思います。」

「ふむ、ならば後は・・・、ミライさん、ブリッジに全員を召集してくれ。戦闘員達にも今回の作戦を諮りたい。」

WB全域にすぐさま命令が届き、アムロを始めとしたパイロットとWBのクルーがブリッジに集合する。

「本来なら一人一人意見を聞きたい所なのだが、時間がないので多数決を採る。まず、このままシャアから逃げ切ってルナ2に逃げ込んだ方がいいという者。」

後方からちらほら挙がる手がある。

「では、シャアの補給の隙をつき補給艦を潰して、シャアへの補給を実行不能にした上で、そのどさくさにまぎれてルナ2へ退く。この案に賛成の者。」

俺やアムロ、パイロットの候補生のリュウさんを始めたWBのクルーのほとんどの手が挙げられる。最後にブライトも手を挙げ、この作戦に決まる。

「ふむ。では、この作戦を採る。アムロ、アステルはガンダムで出撃。リュウはコアファイター。ハヤトとカイはガンタンクで待機。いつでも出撃できるようにしておけ。メガ粒子砲スタンバイ、WB 180度回頭！」

WBがシャアのファルメルに向かい、向きを変える。

「アステル・ロア、プロトガンダム出る。」

「アムロ、行きまーす。」

「リュウ・ホセイ、コア・ファイター出るぞ。」

順に射出されるMS、戦闘機、シャアのファルメルの姿がぼんやりとだが見て取れる。俺はアムロのガンダムとリュウさんのコア・ファイターの後に続いた。

パプア補給艦。

一年戦争開戦時点で既に旧式化している補給艦だ。艦の様子を見れば、使いこまれ老朽化しているのが見て取れる。

「よくもこのようなくたびれた艦が現役でいられるものだな。」

パプア補給艦を見て、シャアが呟く。

「ドレン、映像回線を開け。」

「ハッ。」

映像回線がパプア補給艦艦長ガテムにつながる。切り出したのはシヤアのほうだった。

「ザク5機を要求したのに3機、それも物資の補給も十分ではないな。」

「ワシにいうな。上に言え、そういう事は。上のお偉いさん方も苦労しているということさ。だが、持ってきた物資は何があっても渡

してやる。」

「そうでなければ困る。ハッチ開け。パプアとのドッキング、急げ！」

ドッキングパイプがファルメルに接続され、補給の受け取り体制が完了する。

そのころアステル達はリュウのコア・ファイターを先頭にアムロのガンダム、アステルのプロトガンダムの順でファルメルの目の前まで来ていた。リュウがコア・ファイターを加速させファルメルが発見できる場所まで直進しようとする。それを見咎めたアムロとアステルはすぐにリュウに合図をだして、うながす。

「行くなというのか。敵は目の前だぞ。」

「正面から攻めるのではなく、回り込んで攻めましょうリュウさん。」

「アムロに代わって俺が答える。」

隕石を影に回り込みながら、太陽が背になるように進むとぼんやりとしか見えていなかったファルメルと、それに繋がっている補給艦の姿が見てとれる。

アムロがハイパーバズーカをコンベアパイプに向けて撃つ！それに伴い、爆発しするコンベアパイプ。

「コンベアパイプをやられた。船をファルメルから放せ！」

「ガDEM、運んできたザクを放出しろ。」

「ああ、何とかしよう。」

「アツシユ、マチユウ、フィックス。ザクに乗り込む準備をしておけ。私は先にザクで出る！」

そのときファルメル、パプアに再び衝撃が走る！プロトガンダムとガンダムがそれぞれの艦にバズーカを命中させたのだ。

「アムロ、シヤアがくるぞ！」

「分かってる・・・、来た。」

シヤアがこちらに突っ込んで来る！

「ふふ、MSの性能の違いが戦力の決定的な差では無いと言つことを、教えてやる。」

そう言うと、ザクが視界から消える。

いつのまにか後方に回り込まれており、捕まる。しかしバーニアを点火、さらに拳をおもいきりぶつけてザクを引き剥がす。

「ええい、連邦軍のMSは化け物か！」

ザクが一瞬ひるんだ隙について、ガンダムがハイパーバズーカを撃つ！しかし弾速の悲しさ、シヤアは最低限の回避運動であっさり回避してしまふ。

「ふふふ、さらばだ。不慣れなパイロット達め・・・。」

ザクがヒートホークを構え、こちらの様子を窺う。

しかしシヤアは突然、武器をザクマシンガンに持ち替えたかと思うと、牽制用にザクマシンガンを放ちながら突如、母艦に後退していった……。

side シヤア

シヤアが母艦に引き上げたのはドレンからの通信のためであった。

「シヤア少佐、お戻りください。ファルメルはメガ粒子砲が補給中で使用できないため、ろくに反撃もできず……。」

「何だと！今行く、私が行くまで何とか持たせる。」

チツ、運のいい連中だ。次こそ落としてやる、必ずな！

シヤアは痛恨の思いでファルメルに引き上げていく……。

WBは補給中のためメガ粒子砲が使えず、物資が尽きているためミサイルでの反撃もろくにできないファルメルをほとんど一方的に攻撃していたが、メガ粒子砲でとどめを指す事はできずにいた。リュウがパプア補給艦、ファルメルを交互に攻撃し、その間を動かかなかつたからだ。

「リュウの奴、あれじゃあこっちの主砲が撃てねえじゃねえか。ハ

ヤト、ブリッジに伝える。リュウにどけてな。」

「待ってください。ブリッジに連絡する方法は・・・、これだ。」

ハヤトがブリッジにカイの言葉を伝える。ブライトはすぐさま回線をリュウに繋げるが回線が切れているのか繋がらない・・・。

そこでブライトはガンキャノンに出撃命令を出す。

「やむをえん……。ハヤト、カイ、ガンタンク出撃。近づいて補給艦を狙え。」

「了解。」

ハヤトの短い返事とともにガンタンクがよたよたと敵のパプア補給艦へと近づいていく。しかし、ファルメルもパプア補給艦もWBに気を取られ、全く気が付いていない。あと10メートル、5メートル、1メートル……!。

停止したガンタンクから120mm低反動キャノン砲が発射され、パプア補給艦に命中する!それと同時にパプア補給艦は今のが致命傷だったのか物資をばらまきながら沈んでいく。と、同時にMS-05ザク?(以後、旧ザクと呼称)が飛び出してくる……。

ザクとともに大量の物資がばらまかれていく……。

「大概の物は放出したはずだ。敵を倒したら收容してくれよ。」

ガダムは言い放つと先行していたガンダムの姿を見つける。

「あれか。連邦軍の作ったMSってのは!」

ガンダムに向かっていく旧ザク、しかしシャアのザクがそれを止める。

「ガテム、落ち着け。」

「ワシの船をやられたんだぞ。ワシとこのザクとて百戦錬磨の戦いを潜り抜けてきたのだ。にわか作りの連邦軍のMSなど、ワシの敵ではないわ！」

「ガテム、そのザクでは無理だ。止める！」

ビームサーベルを旧ザクの目の前で振るガンダム。しかし、旧ザクはその動きを完全に見切っており突進の重心をほんの少しずらしただけで回避し、ショルダータックルをガンダムの胴体にくらわせる。アムロはコクピットの中で昏倒しそうになったが、持ち直してビームサーベルを旧ザクの胴体に切り込ませてゆく。もういいだろう。旧ザクを蹴飛ばし、退がるガンダム。

「れ、連邦軍はあれほどのMSをか、開発したのか。う、うおおお。」

爆散する旧ザク。それを眺め啞然となるシャア。

「パプアがやられ、ガテムが死んだ。連邦軍の新型兵器の前に我らはことごとく敗北した。それは分かる。しかし、それらを運用するパイロットも、作戦も戦術もまるで素人だ。これはいったいどういうことなのだ。」

連邦もジオンもなり振りかまっていられんということか。そう言い

放つとシャアはパプアを落とし、引き上げていくWBを物不思議そうに眺めていた……。」

プロトガンダム、ガンダム、コアファイターからアステル、アムロ、リュウが降りて、ブリッジへ上がる。

「すまんなあ、ブライト。俺、回線切っていたみたいで

ああ、気をつけてくれよと言リュウに言うと、ブライトは俺とアムロの方に向き直り、言った。

「アムロ、アステルお前達は敵の後ろに回り込みすぎだ。」

「いや、あれはあれでいいんだ。」

リュウが間に入る。

「そうです。あれはシャアが早すぎたんです。」

「シャアの動きは俺達の予想を超えていました。」

俺達の言葉を聞くと、ブライトは俺とアムロに向けて言い放った。

「シャアは赤い彗星と呼ばれる男だ。これからは、いままでの戦いを踏まえて、もっと戦い方を考えて戦うんだ。」

「はい!」

俺とアムロの返答がかぶる。こんな時なのに俺は逆に何も言われなくてほっとしていた。毎回あれではさすがに身が持たない。それに

あれはブライトなりに考えて俺達に贈った言葉だと思えた。横でリ
ユウさんに文句をいうアムロを眺めながら、こつこつのも悪くない
…。俺はそう感じ始めていた。

補給艦撃墜作戦（後書き）

今回は、WBと主人公達を同時に書いて、対艦戦闘と、MS戦闘を同時進行で行う事に挑戦しました。まだまだ至らない所も存分にあると思いますが、どうかよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8507z/>

機動戦士ガンダム～小さなニュータイプ～

2011年12月31日03時46分発行